



[講演]

正規学部留学生受け入れ の新時代 —インクルージョン、コラボレーション の実現に向けた日本語教育—

日本語教育センター長
異文化コミュニケーション学部 教授
丸山 千歌 氏

○藤田 それではですね、次のご講演に移りたいと思います。次は丸山先生にご講演いただきます。ご講演のタイトルは、「正規学部留学生受け入れへの新時代、インクルージョン、コラボレーションの実現に向けた日本語教育」です。

丸山先生のご講演も配布資料がございませんので、皆様、画面をご覧ください。それでは丸山先生、よろしくお願いいたします。

○丸山 立教大学日本語教育センター長の丸山でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

早速、「正規学部留学生の受け入れの新時代、インクルージョン、コラボレーションの実現に向けた日本語教育」というタイトルでお話しをさせていただきます。**【スライド⑤-1】**

本学の留学生については、昨年度のシンポジウムのテーマに取り上げさせていただいたんですが、正規の大学院生、学部留学生のほかに特別外国人学生、それから短期プログラム生、いろいろな学生たちがいて、今現在本学には約 1,000 名が在籍しています。この学生たちの日本語の力の多様性は、学習歴であるとか母語であるとか、学習スタイルであるとか、さまざまなところにあるのですが、本日は、正規学部留学生の話に焦点を当ててお話を進めてまいりたいと思います。先ほど池田先生から、本学は国際化をラディカルに変えていくのだ、多様性のその先を求めて進んでいくのだというお話がありましたが、そこのところに関わるお話になると存じます。**【スライド⑤-2】**

立教大学の学部留学生の日本語力についての認識、学内のですけども、これまでの経過を 3 段階ぐらいに分けられるのではないかと私は考えています。

2015年辺りまでは、先ほど池田先生が、日本語力が本当に遜色ない学生たちが入ってきてというようなお話をされていましたが、日本語の支援が不要で、日本語母語の学生たちと同じように学んでいける学生が「留学生」なので、立教大学には留学生がいないんだというようなお話もキャンパスの中であったと聞いているくらいです。

そのような認識の中で、外国語として学ぶ科目の中に全学共通科目というのがありますけれども、その第二外国語のところにも日本語も位置づけられていますが、2015年までは1レベルだけで展開していました。が、日本留学試験導入以降の傾向、全国的な傾向や本学の留学生の傾向などを把握する中で、2016年度からは3レベルにして、学部の留学生は、入学時に全員プレースメントテストを受けて、あるレベルに達していない学生は、この科目については必ず日本語を取ってもらうというような仕組みをつくっています。これが2段階目です。【スライド⑤-3】

そして、これからが3段階目に入っていくのではないかなと思うんですが、現行の外国人入試に加えて、先ほどの池田先生のご講演の中でも触れられましたが、新しい受け入れというのが始まろうとしています。英語で学位を取得するプログラムと、それから日本語力強化プログラムですね。この2つのプログラムが用意されそうということが今、学内で共有されているところですが、本日のミビン先生、それからルッシー先生、それからトゴス先生のご講演というのは、この日本語力強化プログラムに入っていく学生さんたちを想定してお話になったかと存じます。この生徒さんたちにですね、先ほどお話がありましたけれども、本学の大学生活、日本語のトラックの中でぜひ活躍してほしい。立教大学の学生として活躍して、本人が希望する道を切り開いてほしい、こういうお話になっていきますので、大学生に必要な日本語力という点では、飛躍的な向上が望まれていくというふうに思います。【スライド⑤-4】

このような流れから、日本留学の際の大学生の生活のための日本語教育というお話になりますが、日本語教育の課題というのは、今回のこの機会を機に振り返って見たんですけれども、大体2つのところで課題が議論されてきたんではないかなというふうに感じております。

1つは中級の壁とか、中級から上級への壁とかということで、日本語運用力を高めることについて議論がされてきました。初級のときは、一日一日、話せるこ

と、できることが増えていくけれども、中級や上級になっていくと、学習者自身が自分の伸びというのをなかなか実感できない、それはなぜだろう、どうすれば伸びるのか、そういったことについての議論がされてきたと思います。

またもう1つは、アカデミック・ジャパニーズという日本留学試験が始まったところから盛んに議論されているものです。日本語教育の中に批判的思考、それから問題発見、課題遂行能力を身につけさせようとか、レポートの書き方、それから専門への接続、こういったのはこれよりもっと前から議論がされてきたかなというふうに思いますが、今お示ししているようなグループでも、議論が進んできたと思っております。私自身もこういったことに関心を持ってやってきたと思います。

今回のお話は、これからの新しい留学生さんを迎えるに当たって、日本語教育の立場の私たちはこれらの視点をもつだけで十分なのかということです。先ほど池田先生は大学への着地、学部への着地、日本社会への着地、こういったことを話されていたと思いますが、ミビン先生、ルッシー先生、それからトゴス先生のお話の中からは、若い生徒さんたちが大学に入学したときに、一生懸命、国で日本語を勉強してきたけれども、教科学習を理解できるのか、それから自立、生活的に、生活面でしっかりと自立していけるのか、主体的に学ぶこと、レディネスが整っているのだろうか、そういったお考えがご講演の中で紹介されました。

留学生の立場から見ると、居場所があって、快適に留学先で生活できる。これは非常に心が安定して過ごせる大事な部分でもありますし、国で優秀な成績を修めて、日本に留学して、奨学金を受けながら、また道を切り開いていこうと思っている学生さんたちになりますから、優秀な成績を修めて奨学金を獲得する、そのように努力していける、これもすごく大事なポイントになっていくと思います。また、卒業後ですね、きょう、トゴス先生からはいろいろな生徒さんの進路をご紹介いただきましたけれども、4年間の中で、自分はこれから先、どんなふうに人生を切り開いていこうかといったことについても考えられる、こういったことがとても大切になっていくのではないかと思います。【スライド⑤-5】

先ほどお話をいただきましたが、私たちの大学の入り口のところでは、こういった準備ですね、集中日本語を入学後、すぐの学期に行います。2学期目以降、学部での学びにしっかり取り組んでいくために、こういったことを念頭に置いた日本語教育というのを実践していく必要があると考えております。

学部での学びに入る前に集中的な日本語教育をするということについては、既に国立大学の入学前予備教育というのが非常に古い歴史を持っていて、昨年度のこの日本語教育センターのシンポジウムで、このスライドのような形でご紹介をさせていただきました。予備教育とこれから立教が取り組もうとする集中日本語には共通点もあるし相違点もあるということなのですが、相違点の一番大きな点は、学生たちが日本に留学した、その瞬間に、配置大学、そして学部が決まっているということです。つまり、そこに着地する場所が決まったところから留学生生活を開始して、着実に留学生生活を展開していくという点で、この特徴を生かした日本語教育プログラムというのを展開していきたいというふうに考えているところです。【スライド⑤-6】

昨年度の日本語教育センターシンポジウムでは、多様な日本語力の学部留学生の受け入れと、大学での学びということで、本学の学部の先生方から、各学部の取り組みについてご紹介をいただきました。その中で、サポート活動について、学部内での留学生サポート活動についてもお話いただきましたし、それから学部の教育目的に照らして、多様な日本語力の留学生を受け入れる、積極的に受け入れるという、そういった取り組みも先進的に行っている学部があることもここで確認がされました。それから、紹介された事例の中ではどれも、留学生と、それから日本語母語の学生たちがともに学ぶ、それから共同するということから、日本語母語の学生たちも非常に学んでいる。インクルーシブな教育の中に、学びの豊かさがあり、そこに、先ほど池田先生がおっしゃっていたような、これからの時代に必要な人材育成の希望がある、そんなお話もいただいております。【スライド⑤-7】

とは言っても、JLPT、N3 ぐらいの日本語力ですから、今、立教大学にいる学生にとっても、学びについての学部の期待に応えるハードル当然高いという認識は、私たちは持ってなくてはいけないと思います。私自身も学部の先生方と一緒に教材を選んだり、図書を選んだり、いろいろなことをやっていますが、そういう中で、先生たちの学生への期待というのも本当に感じていますので、N3 の留学生にとっては越えるべきハードルは非常に高いわけです。ただ、その先の将来を考えていったときに、ハードルを下げてほしいとかという話では全くありません。

本学にも多様な日本語力の学生たちが今、留学生たちがいますけれども、その

中で、すごく高いハードルが設定されていても、優秀な学習成果を収めている留学生たちというのが少なからずいます。これが今、本学にある現実だというふうに私自身は思っています。【スライド⑤-7】

立教大学に来て、だいぶ時間が経ちましたけれども、留学生の学びに接している中で、何というか、正式にインタビューを行ったわけではないのですが、頑張ってるな、ああ、こんなふうに工夫してやるんだと感じた瞬間がときどきあります。留学生がどのように勉強して成果を上げているということについて教えてもらって、記憶に残っている事例が幾つかありますので、少しご紹介したいと思います。

これは本当に日本語教育とぴったりという話じゃないのですが、ある留学生は日本語力が低めなんですけれども、とてもよく頑張って、日本語大変じゃない？ということ聞いたことがあります。そしたら大変だと。どうやって勉強してるの？と聞くと、講義の録音許可を、授業が始まる前に先生からいただいて、授業後は、図書館でそれを聞き直して、何回も聞いて、理解する。そういうことを繰り返していくうちに、だんだん、大学での学びについていき、自分で満足できる成果を上げられるようになった。こんな話を聞いたこともあります。

それから、私が所属している学部では、基礎演習という科目があって、そこで留学生のサポート活動をしています。例えば発表の準備であるとか、日本語をチェックしてもらうであるとか、そういったことを日本語母語の学生、それから日本語が得意な留学生もバディに回ることがありますが、そういったバディ活動をしています。この活動はうまくいってるペアと、それからなかなかきちっと機能してないと思うペアと、毎年いろいろあるんですけれども、うまく機能しているペアで、バディ活動に満足している留学生に、どんなふうに取り組んでくるんですかという話を聞いたことがあります。すると、その学生からは、相手も忙しい。相手の予定、自分と同じで、試験期間がもうすぐだろうなとか、そういうことを考えて、自分はいつでも時間の余裕を持ってバディに相談をする。そのために準備をする。そのように自分のスケジュールを組み立ててやっているというんですね。私なんかはなかなかまねできないようなことで、すごいなというふうに思って聞いた話です。

それから、講義に関する知識は、これは自分の母語での情報も活用すると。そういうふうにして理解の下敷きになる情報を増やして講義に臨む、こういっ

とをしている学生たちもいます。

それから親しい友人を持ち、しっかりと人間関係を作っていく、そして大学で必要な、いろいろな細かな情報のネットワークへのアクセスというのを容易にする。いつでもいろんなことにアンテナを張って生活をしているというようなことを教えてもらったケースもあります。これは1人の人間からではなくて、いろいろな学生からいろいろなときに聞いたこと、その中でも心に残っている事例なんですけれども、どれも、ミビン先生、ルッシー先生、それからトゴス先生がおっしゃっていたようなご心配、留学した先でちゃんとできるかな、そこをしっかりとやってほしいという期待に応える、そのハードルを乗り越えていくしなやかさがある事例ではないかというふうに思います。これらは、よく見てみると、言語学習、学習ストラテジーの中では、間接ストラテジーというところに入る部分で、メタ認知ストラテジー、それから社会的ストラテジーというところに当てはまっていくのではないかなと思います。先ほどお示した、大学生活での日本語教育というのを考えていくときに、今まで日本語教育でそこを重視しながらやってきたかなということとつながっていく話のような気がしております。【スライド⑤-8】

さて、大学、それから学部への着地への支援に重点を置いた入学後の第1学期目、どんなふうにしていくかっていうことなんですけど、全体としては、集中的に日本語を学ぶということや、それからやさしい日本語による科目を履修するというのをしながら、学部所属する学生としての生活を整えていく。入学直後から学部生として過ごすというはっきりしたイメージがあるんですけど、その中で日本語クラスをどうつくっていくかということについては、本日、先ほどの池田先生からのご講演でもこんなふうにしてほしいというご希望が出ていたところでございます。スライド③の学部との連携、チューターの活用による専門の日本語、仮ですけれども、そういうことを考えています。これは専門を学ぶということよりも、専門の入り口に立つというような、先ほどお示した高いハードルをしなやかに乗り越えていくための社会的ストラテジーであるとか、メタ認知的ストラテジー、そういったものも全部組み込んで、息を吸うように、自転車をこぐときに自然に体が動くように学びに向かっていく。新しい立教大学の姿に、どんどん近づけていく、そういうことを目指していく科目にしたいというふうに今思っているところです。【スライド⑤-9】

現在の進捗ですけれども、学部との連携が少しずつ始まっていて、学部の先生方の期待というのも見えてきております。また、チューターとの連携をしながら、学部に着地するということを目指していく部分については、研修を含めて設計していこうということを考えておりますし、先ほど申し上げた日本語力が多様な留学生を迎えることが立教の学びを豊かにしているんだというふうにも実感できるような実践、それから成果というのをどういうふうにつくっていったらいいか、こういうことを考えることを具体化しているところでございます。本日の司会を務めてくださっている藤田先生、それから視聴者として参加している日本語教育センターの先生方がいらっしゃるんですけれども、その先生たちとカリキュラム、そして教材開発を鋭意行っている、全力で行っているところでございます。来年、それから再来年のシンポジウムでは、こんな形になったということをご報告できるように頑張ってみりたいと思います。【スライド⑤-11】

私のご報告は、経過報告のような形になりますが、現在考えているところはこのようなことでございます。ご清聴ありがとうございました。【スライド⑤-12】
○藤田 丸山先生、ありがとうございました。以上で5名の先生方のご講演が終了になります。

【スライド⑤-1】

正規学部留学生受け入れの新時代 —インクルージョン、コラボレーションの実現に向けた日本語教育—

立教大学日本語教育センターシンポジウム2020

2020年12月12日

立教大学 日本語教育センター長

丸山千歌

【スライド⑤-2】

本学の留学生—日本語力の多様性—

<本学の留学生>

正規大学院留学生

正規学部留学生

特別外国人学生（学部、大学院）

短期プログラム生

<多様性の要因>

学習歴（どこで、どのくらい、どのように）

母語（漢字圏／非漢字圏、文法構造の近似）

学習スタイル…

【スライド⑤-3】

正規学部留学生の日本語力の多様性に対する認識

<2015年度まで>

日本語がよくできる、日本語の支援が不要

日本語母語の学生と同じ

全学共通カリキュラム 言語B日本語 4単位 1レベルのみ

<2016年度以降>

日本留学試験導入以降の傾向、本学の留学生の傾向を把握

全学共通カリキュラム 言語B日本語 4単位 3レベル設定

入学時 日本語PT実施 → J6以下は日本語に配置

【スライド⑤-4】

正規学部留学生の日本語力の多様性の広がり

-これまでの選抜方法に加えて… -

現行の外国人入試に加え「新しい受け入れ」へ

- ①英語で学位を取得するプログラム
- ②日本語力強化プログラム (JLPTN3程度で入学)



本日の講演
1、2、3

課題…大学生活に必要な日本語力の飛躍的な向上

【スライド⑤-5】

日本留学における大学生活のための日本語教育の課題

- ・「中級の壁」… 運用力（語彙、文型だけではない）
高見澤（2016）、山本（2019）等

- ・アカデミック・ジャパニーズ

批判的思考力、問題発見課題遂行能力、レポートの書き方、専門との接続

アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会HP他

これらの視点で十分か

大学への着地、学部への着地、日本社会への着地

居場所があり快適に過ごせる
優秀な成績を修め、奨学金が獲得できる
自らのキャリアプランを考えられる

【スライド⑤-6】

国立大学の入学前予備教育との異同 丸山（2020）

共通点	相違点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 選考（日本語力によらない学力に秀でている） ・ 目標 大学学部入学後に日本語による講義を聞き、必要な課題をこなし、単位を取っていくことができる力をつける 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入学前予備教育ではない ・ 教育期間（1年か半期か） ⇒ 半期または1年 入学時の日本語力に応じたクラス編成 ・ 配置大学、学部が決まっているか ⇒ 決まっている。 本学への着地支援が重要

【スライド⑤-7】

『日本語教育センターシンポジウム2019
多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学び』
観光学部、経済学部、異文化コミュニケーション学部、経営学部の事例

サポート活動 (浜崎 2020、巖 2020)

学部の教育目的に照らして、多様な日本語力の留学生の受け入れを積極的に行う (浜崎 2020)

共に学ぶ、協働することから、日本語母語の学生たちが学んでいる (韓2020、巖2020、浜崎2020、上西2020)

とはいえ、学びについての学部の期待は高く留学生が超えるべきハードルは高い
ハードルを下げて、という話ではまったくない

この条件の中で、優秀な学習成果を修めている留学生たちが確実にいる

【スライド⑤-8】

一教員が学んだ、成果を上げている留学生の学習方法の事例

- 講義の録音許可をもらい、授業後は図書館で聞きなおして理解を深める
- 基礎演習のバディとの活動は相手の予定を考えて、時間の余裕をもって準備すると円滑に進む
- 講義に関する知識の獲得は、自分の母語による情報も活用する
- 親しい友人をもつことで、大学の情報ネットワークへのアクセスが容易に

高いハードルを乗り越えていくしなやかさ
間接戦略：メタ認知戦略・社会的戦略

【スライド⑤-9】

大学・学部への着地支援に重点を置いた入学後第1学期
〈全体像〉

集中日本語以外に、「やさしい日本語」による科目の履修を前提
→ 学部にも所属する学生として生活を整える。

〈日本語〉

- ① 集中日本語教育（100分×週10コマ 全カリ言語A,Bの10単位分）
- ② レベル別クラス編成
- ③ 学部との連携・チューターの活用による「専門の日本語」

専門の入り口に立つ！
インクルージョン・コラボレーションの実現に向けて

【スライド⑤-10】

現在の進捗

- ・学部との連携
- ・チューターとの連携（研修を含む）
- ・日本語力が多様な留学生（文化・社会背景が多様な留学生）を迎えることが立教の学びを豊かにしていると実感できるような実践、成果

全力でカリキュラムを検討・教材開発中！！！！

【スライド⑤-11】

参考資料

- ・アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会 <http://academicjapanese.jp/publications.html>
- ・上西智子（2020）「留学生と日本人学生の 協働がもたらす学び —学部を越えた実践—」『新しい日本語教育を考える』第9号、立教大学日本語教育センター、71-88頁。
- ・庵成男（2020）「留学生と日本人学生の 協働がもたらす学び —経済学部の実践—」『新しい日本語教育を考える』第9号、立教大学日本語教育センター、41-53頁。
- ・鈴木美加（2004）「国費学部留学生に対する1年の集中予備教育プログラムについて—教育プログラム内外で学生が得るもの—」、東京外国語大学留学生日本語教育センター 移転記念シンポジウム
<http://academicjapanese.jp/dl/publications02/02/251-264.pdf>
- ・高見澤孟（2016）『はじめての日本語教育・2 日本語教授法入門』アスク
- ・浜崎桂子（2020）「留学生と日本人学生の 協働がもたらす学び —異文化コミュニケーション 学部の実践—」『新しい日本語教育を考える』第9号、立教大学日本語教育センター、55-70頁。
- ・韓志昊（2020）「留学生と日本人学生の 協働がもたらす学び —短期日本語プログラムの実践—」『新しい日本語教育を考える』第9号、立教大学日本語教育センター、29-39頁。
- ・丸山千歌（2020）「新しいタイプの学部 留学生の受け入れの ための日本語教育」『新しい日本語教育を考える』第9号、立教大学日本語教育センター、13-27頁。
- ・山本忠行（2019）「言語による価値創造を目指して（4）—中級日本語教育の教材と指導法をめぐって—」『通信教育論集』第22号、創価大学通信教育部学会

【スライド⑤-12】

ご清聴ありがとうございました

【スライド⑤-13】

全体討議

- 1) 生徒さんたちは、留学先の大学でどのような領域を専攻しますか。
- 2) よりよい学びのために、寮生活において、どのようなサポートを期待しますか。